# 古代都城出土の扇

辻　裕司

## 1．はじめに

古代日本の衣服については、律令制による規定により、被り物から着衣・腰帯・持ち物・履物に至るまで、色・形・材質などによって規定されていた。しかし一方で、遺跡からは原則的にその規定に係らない考古資料も出土している。その一つに扇がある。扇はその実用性・装飾性から急速に有職の中に溶け込み、装束における一つの構成要素となって服飾具としての地位を確立し、威儀を正す道具ともなったことが窺われる。煽ぐ道具「扇具[1]」には、団扇・檜扇・蝙蝠扇（扇子）などがあり、本来の目的は、煽いで風を起こし涼を得る実用的な道具である。『大漢和辞典』によれば扇とは「戸と羽との合字。戸が翼のやうに動く」ことから風を送る用具に当てられたとされるが、中国で言う扇とは団扇を指し、古代日本で発明されたとされる開閉自在の扇とは異なる。

さて、都城遺跡などから出土した扇具が集成されたものに『木器集成図録[2]』（以下『図録』とする）がある。『図録』の「檜扇」の項には、骨の形状によって型式分類がなされており、扇具を概観するうえで示唆に富み大いに参考とすることができた。ところが、その後も各都城遺跡などでの出土例が相次ぎ、平安京跡でも幾つかの新たな資料が得られたことから、扇具の変遷について再考する機会を得た。その過程で平安時代に属する資料の中にいわゆる檜扇状を呈する骨から蝙蝠扇状を呈する骨まで平面形態が多岐にわたることが概観でき、当該期に扇具における形態に大きな変化が生じたのではないかと考えられた。筆者は京都市域出土の平安時代に属する木製品の概要を示した[3]中で扇具の概説も行ったが、形態・機能などの変遷過程を明らかにするまでには至っていないため、京都市域出土の扇具を集成し追及するうえで改めて他の都城遺跡の出土扇具と比較検討し、古代における服飾具の一つである扇具の消長さらには蝙蝠扇の出現時期とも関連して考察したいと考えた。なお、現在知られる最も時代の遡る扇具は、平城京跡の長屋王・藤原麻呂邸などが検出された左京二条二坊・三条二坊の調査[4]で出土した檜扇で「日本で最も古い檜扇[5]」として従来から紹介されているが、平安京跡出土の檜扇と比較すると、異形なる骨の形態を呈している。これら扇具はわずか数十年間でどのような変遷を辿ったのであろうか。

## 2．遺跡から出土した扇具

扇具の骨であろうと考えられる木質遺物は、これまでに平城京跡・長岡京跡・平安京跡・鳥羽離宮跡などの都城・離宮遺跡から出土しており、ここでは原則的にこれら遺跡出土扇具を扱うこととする。出土した扇具の骨や部材は、個体ごとに異なり多種多様な平面形態を呈するが、それぞれの扇具について形態と機能の概要をまとめの一端を交えて示しておこう。

1　扇具の概要

扇具は薄い板や棒状の部材からなり、それを組み合わせた木製品であるため、使用時や廃棄時などに破損する確率は高い。従って、そのままの状態で一揃いにまとまった資料はきわめて少ない。

**団扇**　団扇は煽いで風を起こす部位（起風部と仮称する）と起風部を支持する部位（支持部と仮称する）が明確に別けられ、支持部が柄となることが特徴として挙げられる[(6)]。団扇は起風部などの素材に起因するものか、出土例は極めて少なく、支持部についても柄か他の組み合わせ部材に分類される可能性はあろう。確実に団扇の形態を示す例は、わずかに１例が知られるのみである。出土例には折り畳みできる開閉自在の団扇がある。

**檜扇**　檜扇は檜などの柾目材の薄板を複数枚重ね、本寄りに孔を開けて木釘や紐糸などでまとめて要とする。起風部と支持部が同じ一枚の骨からなることが檜扇の特徴と言える。骨の中位か上半部近くに綴じ目の小孔を開けるか、側縁に切り欠きを設けるかして紐糸[(7)]で固定する技法は、広げた角度を保持し、骨同志を連結してばらつきを防止する技法と考えられ、檜扇の特徴の一つとも言えるが、一方で綴じ目や切り欠きが存在せず、明確な綴じ方法をとらないものもある。

現在判明している檜扇の初源は奈良時代前期とされ、投棄された年代は740年頃とされる。平城宮・京から出土した檜扇とされる骨の平面形態は多岐にわたり、多くの種類の檜扇が出現していたようであるが、大半は平安時代以降には見出せない。従って、平安時代以降、現代までつながる檜扇は、それらの中でも有職の中で支持されて生き続けた最も実用的で洗練された檜扇であったと理解することができる。なお、出土資料を見るかぎり、時代が下がるに従い一枚ごとの骨の幅が狭くなるとともに骨の枚数が増加し、全開の形に復原した場合の開き角度が広がること、骨の長さが短くなる傾向にあるようである。

**蝙蝠扇**　蝙蝠扇は檜扇の骨に比べると幅が狭く厚みのある数本程度の材を重ねて本は要でまとめる。骨に紙（布）を貼って起風部（この場合、紙などは綴じ材とも捉えられるが、起風が主眼である）とするため、蝙蝠扇の骨は文字通り骨として紙を支持する支持部へと役割を変じた。

起風部に紙などを用い、扇具の世界に新たな展開を示した蝙蝠扇は、檜扇が有職の世界に埋没していく状況とは対照的に、薄く軽量で実用性に富んだ扇具として広く普及していく[(8)]。

蝙蝠扇の出現時期は厳密にはわからない。しかし、遺跡から出土する扇には、骨の形態から檜扇か蝙蝠扇のどちらとも区別の付かない扇骨の存在することは確かであり、これが蝙蝠扇出現の鍵を握る骨ではないだろうか。すなわち、檜扇の変遷過程の中に蝙蝠扇の産声を聞くことができる可能性が指摘できるのではないかと考えられるのである。

2　扇具の分類手順

次に、奈良・平安時代（一部、鎌倉時代のものも含む）の檜扇・蝙蝠扇の分類手順を示しておと、まず、檜扇の骨の平面形と末の綴じ方法が基本的な製作・構成要素であると捉え、分類要素とした。蝙蝠扇は出土例が少なく、ここでは本の端の形状を基に分類している。扇具の本をまとめる要（要孔）は、開閉自在式のすべての扇具に共通した基本的な要素であり、例外的な２孔の

ものを除けば１孔であることから、敢えて分類の対象とはしていない。また、具体的な全開時の形や祖形を追及する目的から、出土した骨を基にして全形を復原し、実用の扇具として視覚的に表現した。檜扇は全形を想定した場合に骨相互の重ね率は不明であるため、すべて末の端が相互に接した状態で、蝙蝠扇は紙幅が不明のため伝世品例から全形を復原した[9]。なお、以下に示す扇具の番号は、混乱を避けるため各報告書の既報告番号をそのまま使用し書名と併記して表すこととする[10]。実測図は報告書の図を複写し、トレースした。縮尺は１／８としている。

３　各扇具の特徴と概要

**団扇**　起風部の平面形により、丸い「団扇」と方形を呈する「方扇」があろうが、ここでは総称として団扇としておく。団扇の起風部の素材には、植物の葉・鳥毛・紙・布などを使用したと考えられるが、腐食しやすいため遺存例は知らない。また、出土例も極めて少なく形態や使用状況などは絵画史料などから窺い知る程度である。遺跡から出土した扇具の中で団扇と認識できる類例は、平城京跡から出土した１点があるのみである。これ以外に団扇の部材と想定できる木製品が長岡京跡の下層遺構で１点出土している。出土例や絵画史料などから知られる団扇には開閉自在式と固定式がある。

団扇①（開閉自在式）　この団扇には（１）がある。全形のわかる唯一の資料である[11]。23枚の骨を起風部とし（全周するとして復原した場合は32枚を要した。右図では『図録』の復原図とは別の復原を行っている）、それよりも厚く長い２枚の支持部を柄とする。骨と柄は要でまとめられ、２孔１対の綴じ目に紐糸を通して骨を連結し、柄の一方を１回転すれば、起風部が円形に広がるという使用例が想定される。

なお、この部材が出土したとしても、破損・分解された場合には、別の扇具か木製品に分類される可能性はあろう。

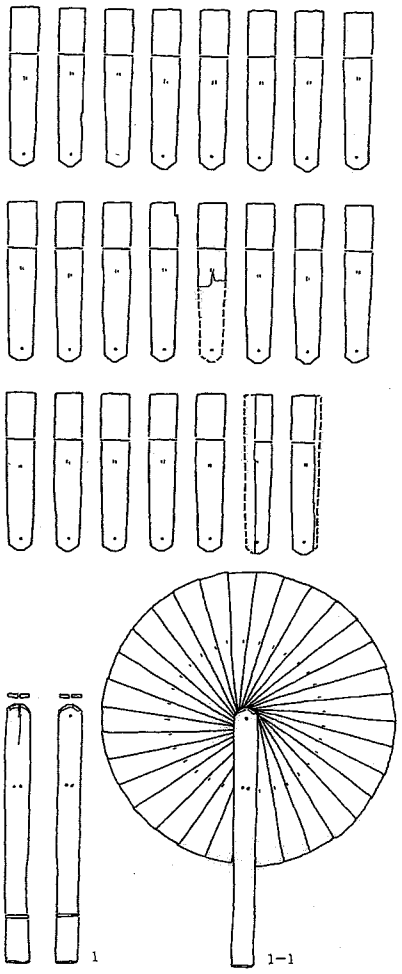


図１　団扇①（１：『図録』1605）および復原図

団扇②（固定式）　この団扇には（２）がある。起風部を受ける支持部（受け部）の遺存例である。長方形の厚板を使用し、起風部を受ける側と、柄が連続する本側を半円形に削り上げる。支持部と柄は一木であるが、柄は折損する。支持部の断面形はレンズ状、柄の折損箇所の断面形は楕円形を呈する。支持部の木口に起風部を受ける幅0.6cm、深さ6.8cmの深い溝を切り込む。この溝に起風部となる素材を取り付け、組み合わせた固定型の団扇であろう[12]。なお、この例のみが古墳時代前期に属するが、固定式の参考例として取り上げた。

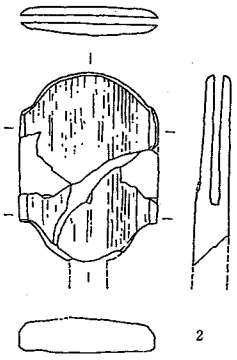


図２　団扇②（２：『水垂』932）

**檜扇**　扇具の中では最も多く出土しており、骨の平面形態についても多様である。檜扇の分類にあたっては、全開時の平面形から方扇形と扇形の２種に分類した。次に骨の平面形から、封緘形・長台形に分類した。また、骨の綴じ方によって紐糸綴じ・綴じ無しに細分している。なお、奈良時代の檜扇には、骨の下半部側縁に削り込みや切り欠きによって装飾を施すものがあるが、全く装飾を施さない骨もあり、長岡・平安時代の骨の大半には装飾を施さない傾向にある。また、同一工人ないし工房によって大量生産されたことを窺わせる程の類型化された装飾はみられないこと、装飾が檜扇の形態に影響を及ぼしたことは想定できないことから、ここでは装飾の有無による分類は行っていない。

１）檜扇の分類

ア　全開時の平面形

方扇形　広げた場合に、概して末中央が高く、両端に向かって長さを減じて山形を呈するもの。広げた場合の全形が方扇の柄を除いた形状を呈する。

扇形　長さが同一の骨を使用し、広げた場合の全形がいわゆる扇形となるもの。長方形の薄板の一端に穿孔し、複数枚を紐糸などで綴じ合わせた形状を呈する[13]。

イ　一枚ごとの骨の平面形

封緘形　骨の下半側縁を本に向かって削ることによって下半が柄状の形状を呈するもので、角度を変える程度のものと強く削り込むものがあり、骨の平面形は封緘木簡[14]状を呈する。

長台形　骨の左右端を末から本に向かって削り、徐々に幅を減じるもので、骨の平面形は縦方向に長い台形を呈する。

ウ　綴じ方

紐糸綴じ　この綴じ方法には孔綴じと溝綴じの２種[15]がある。孔綴じは骨の中央付近あるいは末寄りに２孔１対の孔を開け、紐糸を通して扇の開閉に際して開き角度を一定に保つとともに、骨同士をまとめて一連の起風部とするもの。溝綴じは原則的に孔綴じと同じ用途に使われる骨のまとめ方であるが、紐糸を通す孔を開けず、末寄りの両端に三角形状の切り欠きを設け、紐糸を結び固定する綴じ方である。

綴じ無し　何ら綴じ方法を採用することなく、そのまま使用する簡便な方法である。緩やかに扇面を動かすことによって各骨はすべて同方向に撥ねて風は十分に起こる。この場合、両端の骨が厚くいわゆる親骨となることによってさらにまとまりは強くなろう。製作上は綴じる工程を簡略できる。ただし、末を綴じないため、扇を広げるときの骨の重ね方や、開き角度を一定に保つことには困難を伴うことから、自ずと骨数の制限を受けることになることが想定できる。骨数の多い伝世品には、綴じ無しの檜扇はみられない。

貼綴じ　想定可能な綴じ方法として挙げておく。綴じ材に紙や絹などの布を骨に貼ってまとめる綴じ方法であるが、骨に痕跡がないかぎり先の綴じ無しとは別けられない。末側の骨間に骨の幅の半分か同程度の紙などを貼る方法を想定した。この場合、紙や布などは紐糸と同様に骨を纏める綴じ材と言えようが、紙幅によっては起風部的な役割も受け持つことになろう。

2）　各種の檜扇

ア　方扇形檜扇　本に比べて末幅が広い。末の形状には山形・片山形・平形があり、全開時の部位により異なる。骨は広げた状態の中央骨が最も長いものが大半で、他の骨の末は、一方を切り落とし端骨になるほど長さを減じて中央骨から両端に向かってやや強い角度となり、歪な山形「方扇形」を呈する。骨の下半に装飾を施すものと施さないものがあり、末の一端を切り欠き装飾とするものもある。骨の長さが30cm前後の大型のものと、20cm前後の小型のものがある。

方扇形檜扇①（方扇・封緘形ー孔綴じ式）　この檜扇には（3～5）がある。下半両側縁を強く削り込む。綴じ孔は縦・横方向とも中央部に位置する。3・4は大型、5は小型に属する。

方扇形檜扇②（方扇・長台形ー孔綴じ式）　この檜扇には（6～9）がある。6～8の綴じ孔は方扇形檜扇①と同様の位置にあるが、9の綴じ孔は横方向には両側縁に、縦方向には末側に位置する。8は要孔が2孔あり、紐糸で固定したものであろう。6～8は下半側縁を削り込みや切り欠きによって装飾を施す。7～9は大型、6は小型に属する。

方扇形檜扇③（方扇・長台形ー綴じ無し式）　この檜扇には（10～12）がある。12は末の端が片山形に傾斜し、長さも一定でないことからここに収めた。11・12は大型、10は小型に属する。

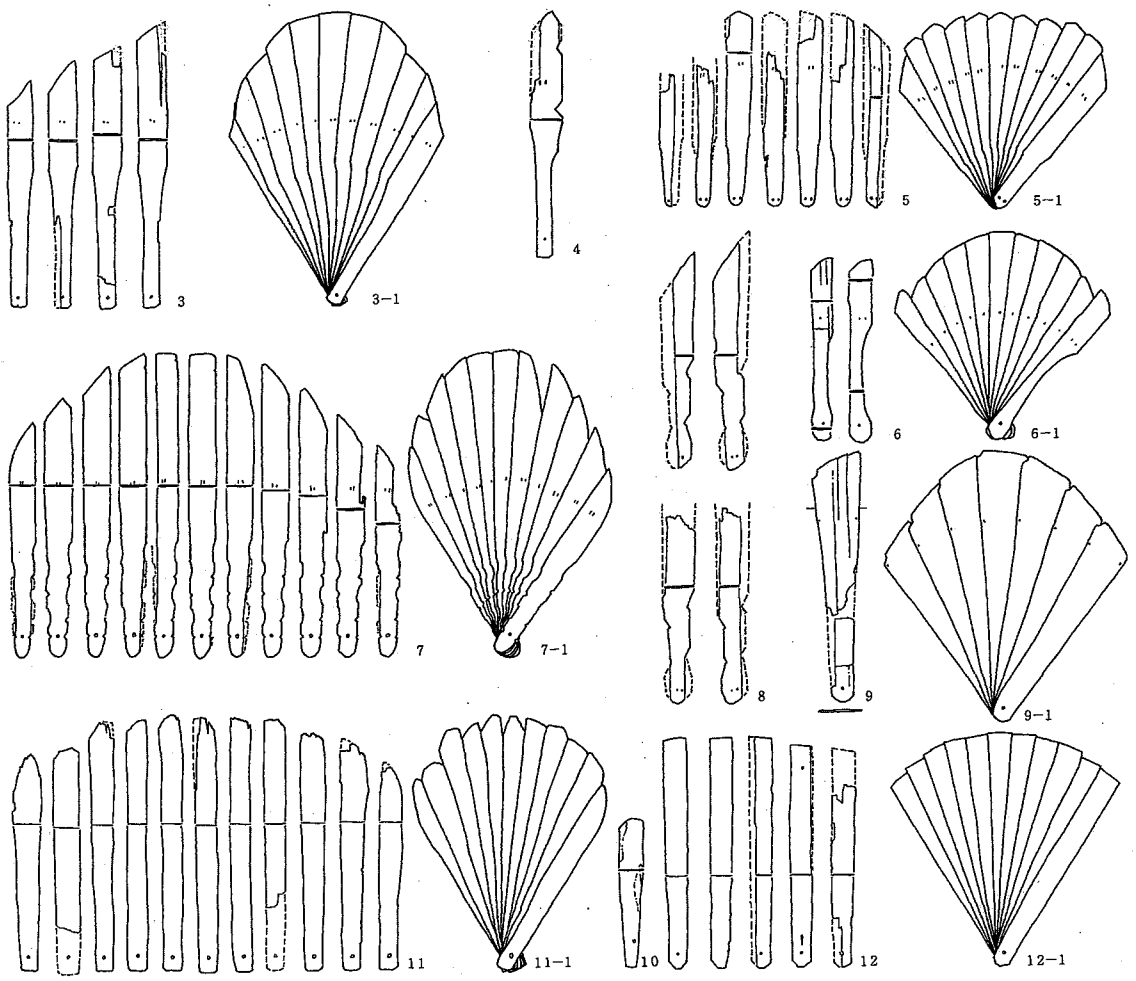


図3　檜扇　方扇形檜扇①（3～5：『図録』1601・1505・1602）　方扇形檜扇②（6：『長屋王』73、7・8：『図録』1501・1504、9：『平安右八二二』1）　方扇形檜扇③（10：『長屋王』75、11・12：『図録』1703・1701）および復原図

方扇形檜扇①～③の一揃いの骨の枚数は、出土例から７～11枚前後と考えられる。

全開時の開き角度[16]は55°～70°程度と考えられるが、紐糸の遊びにより若干の増減はあろう。

綴じ目位置については、方扇形檜扇①・②では、縦位置が骨の中位かやや上にあり、平安時代初頭の９を除けば末近くには至らない。また、横位置は３～８では骨の中央寄りに２孔が近接して開けられるのに対し、９では側縁近くに１孔ずつ離れて開けられており、奈良時代と平安時代の綴じ目位置には明らかな相違が認められる。

なお、方扇形檜扇は末の形状が一枚ごとに異なるため、作成には扇形檜扇に比べ時間を費やすと考えられ、奈良時代に多様な形態が登場したものの平安時代前期に至り衰退したようである。

イ　扇形檜扇　末の平面形状は半円形・半楕円形・山形・平形などがあり、奈良時代前半期のものに平形以外の形態のものが多い傾向にある。骨の下半や末に装飾を施すものと、施さないものがある。骨の長さは、奈良時代前半期のものでは、30cm前後の大型のものと、20cm前後の小型のものがある。大型の中には36cmの長大なものもある[17]。長岡・平安時代のものでは、27cm前後の大型のものと、14～16cmの小型のものがあり、時代が下るに従って小型化する傾向にある。

扇形檜扇①（扇・封緘形－孔綴じ式）　この檜扇には（13～15）がある。下半両側縁は13・14が本側に向かってを強く削り込み、15は中央付近で角度を変える。綴じ孔は縦方向が中央部かやや上に、横方向は中央部に位置する。14・15は大型、13は小型に属する。

扇形檜扇②（扇・封緘形－溝綴じ式）　この檜扇には（16）がある。下半両側縁は本側に向かって削り、中央付近で角度を変える。末側の両側縁に三角形の切り欠きを設け、綴じ溝とする。

扇形檜扇③（扇・封緘形－綴じ無し式）　この檜扇には（17～19）がある。下半両側縁は本側に向かって強く削り込む。19は末の一端を切り落とす。

扇形檜扇④（扇・長台形－孔綴じ式）　この檜扇には（20～25）がある。20・21は下半側縁を切り欠きによって装飾を施す。23は末の側縁一端を切り落とす。綴じ孔は20・21は縦方向が中央部かやや上に、横方向は中央部に位置し、22～25は縦方向が中央上半に、横方向は両側縁に位置する。20・21・25は大型、22～24は小型に属する。

扇形檜扇⑤（扇・長台形－綴じ無し式）　この檜扇には（26～29）がある。29は大型、26～28は小型に属する。

この他、末を折損しているため明確な綴じ方法や形状はわからないが、扇形檜扇の骨と考えられるものがある。（30～40）は長岡から平安時代前期の骨である。このうち、30は一括で出土した。骨は４分割されていたが、本部分で12枚ある。31は７枚出土した。７枚のうち１枚は厚みがあることから親骨と考えられるが、本の平面形が中骨のものと異なるため別の檜扇の骨の可能性もあろう。32は７枚、33[18]は11枚、34は13枚が一括して出土した。このうち、33には親骨と考えられる厚みのある骨が２枚含まれており、一揃いと考えられる。なお、31の親骨と考えられる骨と33・36などは、骨の中位から本に向かって幅が増す形態[19]を示し、他の檜扇とは形状が異なる。

扇形の骨の枚数としては、一揃いと想定できる例や、親骨と考えられる厚みのある骨が含まれる例および復原した開き角度などから、奈良時代のものでは７～11枚、長岡・平安時代前期のも

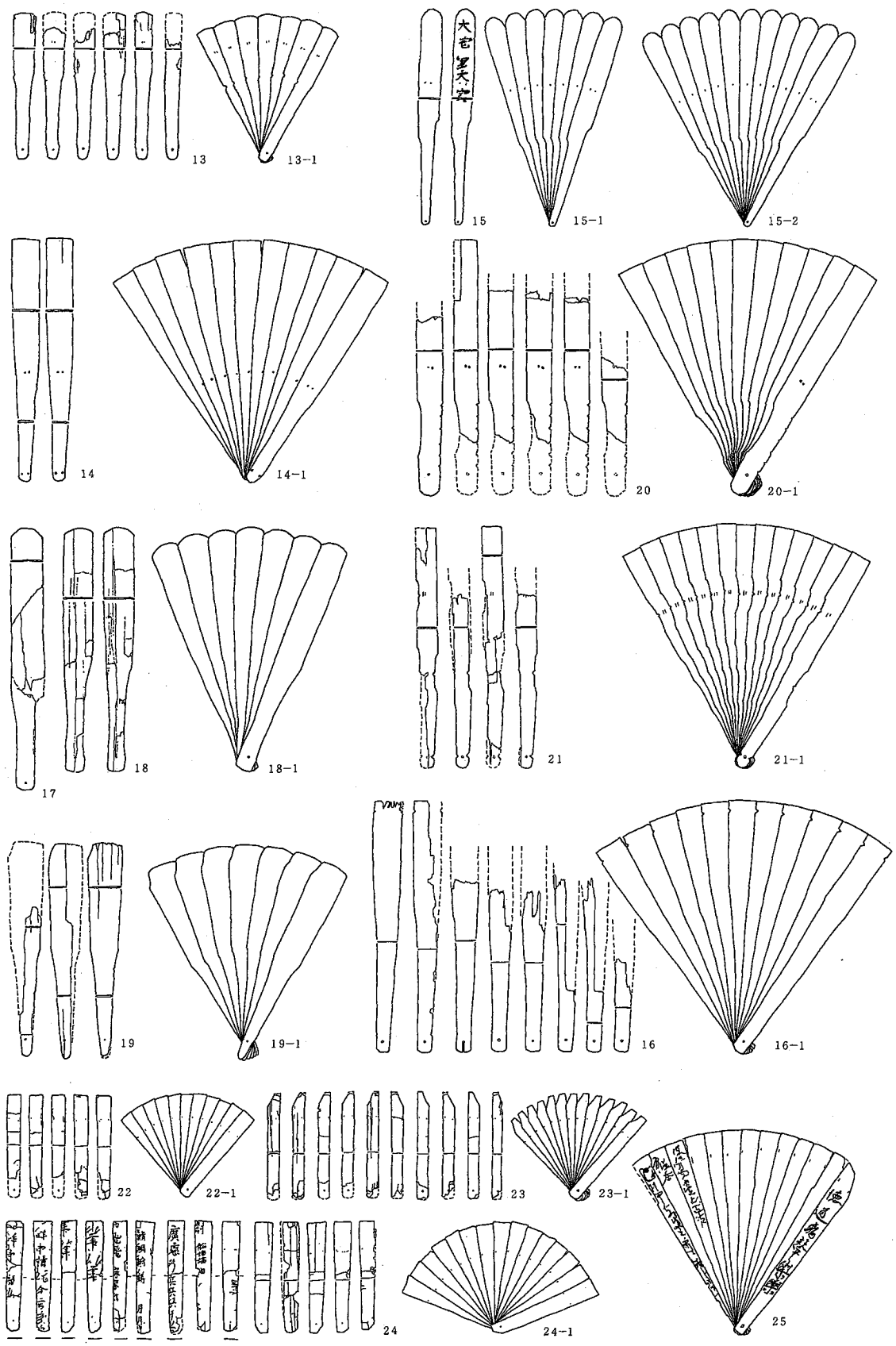


図４　檜扇　扇形檜扇①（13～15：『長屋王』71・190・191）　扇形檜扇②（16：『図録』1603）　扇形檜扇③（17・18：『長屋王』193・194、19：『平城右八一十三』13）　扇形檜扇④（(20・21：『図録』1506・1503、22～24：『長岡京市史』61～65・38～47・48～60、25：『平城右二三四』１）および復原図

のでは11～15枚で一揃いになろう。

復原した全開時の開き角度は、奈良時代のものでは60°～70°、長岡・平安時代前期のものでは75°～90°前後であろう。ただし、24については137°ある。

綴じ目位置は、縦方向では25を除いて概して骨の中位かやや上に、横方向では22～25は側縁近くに開孔する。従って、紐糸による綴じ位置は、方扇形檜扇と同様に奈良時代と長岡・平安時代の間で変化があったことを窺わせ、時代が下がるに従って綴じ目が側縁・末側に寄ることがわかる。また、綴じ目のない骨は、奈良時代前葉頃から存在するが、平安時代前期の扇形檜扇の骨で明確な綴じ方法を取るものはみられず、当該期には大半を占めると考えられる。

**蝙蝠扇**　蝙蝠扇の骨は、起風部にかかる力を保持する役割を担っていることがわかる[20]。そのため、蝙蝠扇骨は檜扇の骨に比べると概して厚く、幅は狭い。一揃いと考えられる資料の中には、さらに厚みのある親骨が備わっている例もみられる。骨の下半に装飾を施すものと、施さないものがある。また、鎌倉時代の例では、漆を塗った骨がある。出土した平安・鎌倉時代の蝙蝠扇骨の素材に竹はみられない。

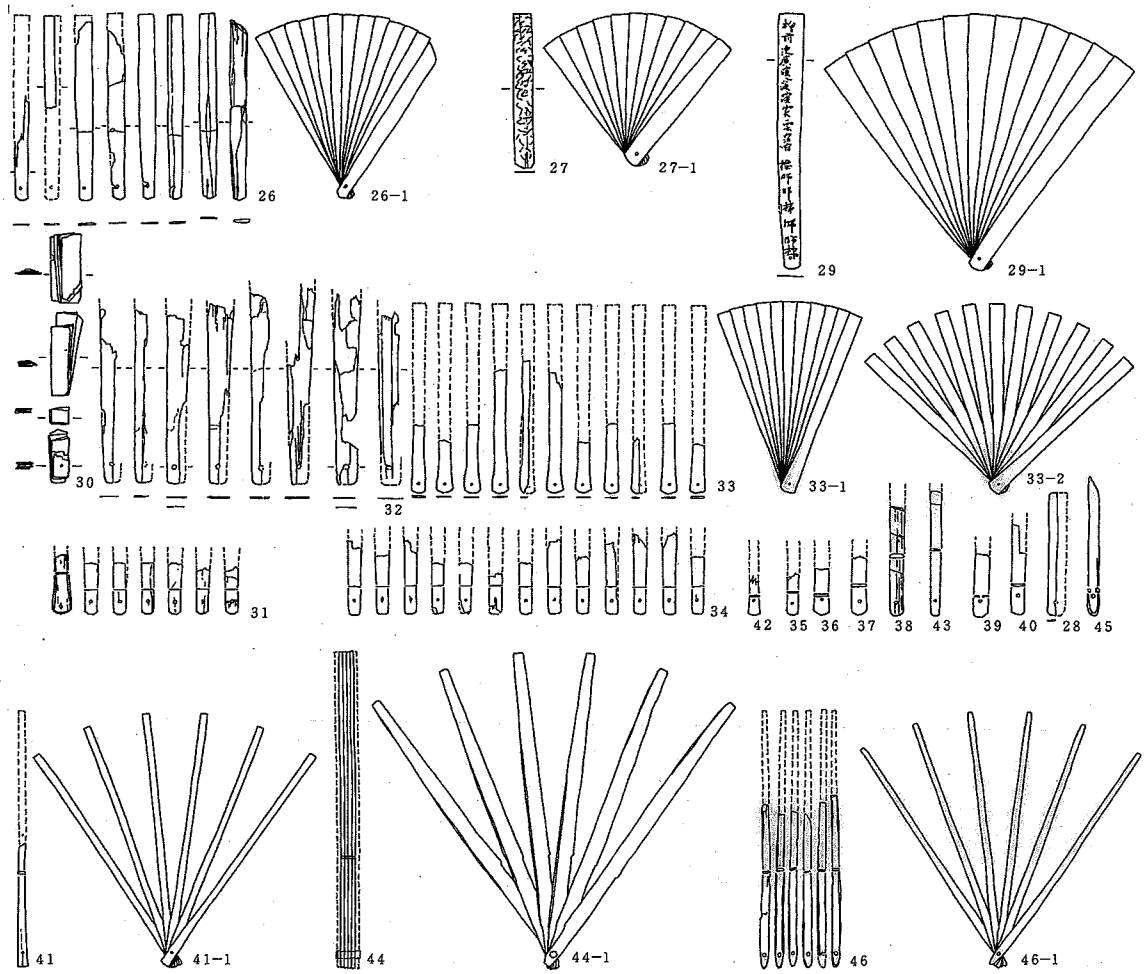


図５　檜扇・蝙蝠扇　扇形檜扇⑤（26：『平城右二二六』11、27・29：『平安右八二二』２・３、28：『図録』1704）その他の扇形檜扇（30・31：『長岡京』２・3、32：『水垂』00、33：『図録』1702、34：『平安右八二二』４、35～38『平安右八二二』５～８、39・40『図録』1705・1706）　蝙蝠扇　蝙蝠扇①（41～43：『平安右八二二』９～11、44：『図録』1709、45：『図録』1707）　蝙蝠扇②（46：『平安左四一五・六』L57～62）および復原図

1）蝙蝠扇の分類

明らかに蝙蝠扇の骨とわかる資料には、鳥羽離宮跡例や平安京跡左京四条一坊四・五町例がある程度で、全形が遺存する骨は少ないため、ここでは本の形態から以下のような分類を行った。

本の平面形には平形・山形・半円形を呈するものと、先端が尖り平面形が柳葉形を呈するものがある。前者は檜扇の本の平面形に類似することから、蝙蝠扇①とした。後者は現代の扇子の骨にも見られる形態を示し、蝙蝠扇②とした。

2）　各種の蝙蝠扇

蝙蝠扇①　この形態を示す骨には（41～44）がある。41～43は平安時代前期に属する骨で、骨の下半部が残る。骨の幅・厚さなどから蝙蝠扇の骨の蓋然性が高いと考えられここに分類した。41の骨は本から末側に向かって幅を減じる。同型のものに42がある。44は平安時代後期から鎌倉時代前期に属する蝙蝠扇である。要が遺存しており、その遺存状況から親骨が失われ本来6枚の骨からなる蝙蝠扇であることがわかる。下半部の両側縁を削り込み簡単な装飾を施す。骨の長さは44が33.6cmあり、奈良時代の大型に属する檜扇の長さに匹敵する。

蝙蝠扇②　この蝙蝠扇には（45・46）がある。45は平安時代後期（12世紀）、46は鎌倉時代に属する。いずれも下半のみの資料であるが、本は尖り気味の柳葉状を呈する[21]。46は6枚の骨のうち親骨と考えられる厚みのある骨が2枚あり、一揃いであろう。親骨と考えられる骨の外側となる側縁は角を落とし丸みを付け、断面形はかまぼこ形を呈する。黒漆を塗る。

## 3．文献史料や絵画史料にみえる扇具

さて、扇については『和名類聚抄』巻14に和名「阿布岐（アフキ）」とある。『続日本紀』24には「天平寶字六年八月丙寅御史大夫文室真人淨三年老力衰優詔特聽宮中持扇策杖」とあり、衰弱した老官人が宮中で扇を所持することに勅許があったことが記されている。団扇は既に存在していたこと、出土例からは天平寶字6年（762）以前に檜扇が存在したことは明らかであり、また、『和名類聚抄』には団扇の項目に「団扇　唐令云団扇方扇」とあり、団扇と扇は別のものと認識されていた。従って、『続日本紀』の扇は檜扇の蓋然性が高く、未だ公式には檜扇を宮中へ持ち込むことは許されていなかったのであろう。平城宮内裏東大溝や二条大路側溝などから多種多様な扇が出土したことと対照的であり、この頃の檜扇が特権階級の個別的な所有品であったことを窺わせる。

その後の扇の足取りについては判然としないが、平安時代に至り状況は一変する。まず、承和年間（834－848）頃に宮廷で侍臣達に扇を送る年中行事がおこっていたことが『西宮記』から知られ、扇が宮中で一般化したことが窺われる。この扇も檜扇である蓋然性が高いものと思われるが、正否はわからない。10世紀後半の『円融院扇合』には檜扇と蝙蝠扇の名が見え、当該期には蝙蝠扇が扇具の一つとして檜扇と対等な位置にあったことを知ることができ、この時期以前に蝙蝠扇が出現していたことがわかる。『宋史』の日本伝には永延二年（988）に東大寺僧奝然が宋に贈呈した品目の記述があり、檜扇20枚、蝙蝠扇2枚が含まれている。このことから、既に10世紀後半には遊戯や贈答に用をなす程の定型化された蝙蝠扇が作られていたことが窺われるのである。そ

の後の状況については『源氏物語』や『枕草紙』など多くの文学作品に檜扇や蝙蝠扇が登場し、扇面の質・色・図柄、骨に塗る色や用いる紙色などについて多くの紙幅が費やされていることからも知ることができる。平安時代中期から後期には蝙蝠扇は扇具の主流となったのであろう。

平安時代後期の状況を知ることのできる『年中行事絵巻』には、団扇・方扇・檜扇・蝙蝠扇などが登場する。内裏や貴族の邸宅には檜扇を広げた人物が描かれ、檜扇が彼らの服飾の必需品となっていたことがわかる。一方、京中には蝙蝠扇を手にした官人や女性などが多くの場面で描かれ、この頃には蝙蝠扇が広く普及していたことが読み取れる。官人や女性は広げた蝙蝠扇を頭上や顔の前面に差し掛けており、蝙蝠扇が涼を得る目的とは別に顔を覆う道具として用いられていることが知られる[22]。蝙蝠扇も平安時代後期には広く普及して服飾の一部となり、軽妙な仕草を誕生させる道具ともなっていたことが絵画史料から窺うことができるのである。

## 4．まとめ

以上、出土資料を基に扇具について分類した。さらに文献史料や絵画史料などに登場する扇具を概観してきた訳であるが、幾つかの問題点も残してきた。ここでは、檜扇の初源と変遷を辿り、檜扇から蝙蝠扇に至る過程についての概要を示しまとめとしたい。

これまで見てきたように、現在判明している最も時代の遡る檜扇は、740年頃とされる平城京跡出土の檜扇である。この広範な遺跡からは様々な平面形態を呈した檜扇の骨が出土している。これら多彩な平面形態を示す檜扇からは、各扇具が個別的な契機によって単発的に製作された経緯やその過程で様々な試行が重ねられた結果と捉えることができ、檜扇発生後の初期段階の様相を呈していることが窺われる。檜扇がどのような過程で産み出されたのかはわからないが、「木簡の一端に穿孔し、複数枚を紐糸で綴じ合わせた形状」や初期の段階に「封緘木簡」状を呈するものがあることなどが手掛かりとなろうか。今後、資料の増加と共に、さらに時代の遡る扇具が検出されることに期待したい。

### 1）　檜扇の発生と変遷

以下、これまでに出土した各種檜扇における変遷、消長を概観しておこう。

まず、方扇形檜扇①・扇形檜扇①～③のような骨の平面形が封緘形の檜扇は、現在のところ長岡・平安時代の遺構からは出土しておらず、いずれも奈良時代に発生し衰退した檜扇と考えられる。檜扇の意匠として封緘形のように骨の下半を削り込む形に固執するほどの必然性はなかったのであろう。また、今回の分類では触れなかったが、骨の側縁に切り込みや切り欠きなどで装飾を施す技法についても奈良時代に通有のものであり、平安時代以降につながらなかった技法と言えよう。また、方扇形檜扇②も大半は奈良時代のものであり、図３－９に示した平安時代初頭の例が１点あるのみである。方扇形の檜扇は長台形に比べれば、骨の平面形態が一枚ごとに異なるため製作の工程に多くの時間を費やしたことが想定でき、大量生産には不適な檜扇であったと捉えることができる。方扇形檜扇あるいは封緘形の骨を有する檜扇は、その後の檜扇の形態や製作技法に強い影響を及ぼすことなく消滅した。一方、扇形檜扇のうち、扇形檜扇④・扇形檜扇⑤な

ど骨の平面形が長台形の檜扇は、同型同大の骨を多量に作り出すことのできる実用的な檜扇としてその後も連綿と受け継がれた。

次に、綴じ目について概観すると、前述したように檜扇の実用面において本来紐糸綴じの目的が檜扇を開いた時の開き角度の保持と、末をまとめて乱れを防ぐことにあれば、綴じ目は末近くにあることが望ましいのである。しかし、奈良時代の綴じ孔式では上記の役割を十分に果たしているとは考えられないことから、当該期の綴じ目の役割が開き角度の保持に重点が置かれていたことを示唆するのではないだろうか。対照的に、長岡・平安時代の檜扇の綴じ目は、末側の側縁近くに開けられており、その後の伝世品として伝わる扇形檜扇[23]の綴じ孔式の技法に連続することからも定型化した綴じ方法と言える。このように、多彩な平面形態の檜扇が誕生し衰退した訳であるが、それらのうち扇形檜扇は技法を変えつつも連綿と受け継がれ、中でも２系列の扇形檜扇が歩みを止めることなく受け継がれたことを窺わせる。一つは扇形檜扇④であり、綴じ目位置が末側の側縁近くに開孔するものが定型化の道を歩み始めた檜扇として有職の中でその地位を確立して行く。一つは扇形檜扇⑤であり、綴じ目を持たない簡便な檜扇として流布して行くのではないだろうか。しかし、扇形檜扇⑤は出土例で見るかぎり平安時代前半期でその幕を閉じるようである。

全開時の開き角度については、一揃いと考えられる資料から方扇形檜扇では55～70°、扇形檜扇では奈良時代のもので60°～70°、長岡・平安時代前期のものでは137°の一例を除き75°～90°前後と想定した。伝世品では、前掲註21に示した平安時代前期の東寺所蔵例では約120°、平安時代後期の厳島神社所蔵例では115°および小型のもので217°ある。従って、広がりつつあった傾向の檜扇の開き角度は長岡・平安時代前期において120°を前後するほぼ一定の角度に収束し、檜扇の定型としてその形態を規定したのであろう。

骨の枚数については、開き角度や骨幅とも関連するが一揃いと考えられる資料からは、方扇形檜扇では７～11枚程度、また扇形檜扇では奈良時代のものでは７～11枚、長岡・平安時代前期のものでは11～15枚程度であろうと考えており、時代が下るにつれて枚数が増加する傾向にある。この傾向は伝世品からも知ることができ、東寺所蔵例の20枚、厳島神社所蔵例の34・35枚がある。平安時代前期に至り一定の開き角度が檜扇の定型となることによって、もはや檜扇の全開時の形は閉塞的な状況を迎えた。それを打破する策として、骨の枚数を増やし閉じた時の形を追及することや、親骨の厚さを増したり、扇面を飾り立てることも行われたのであろう。

なお、ここで檜扇の発生についての想定を示しておくと、まず、一方の端を綴じ一方を広げる形からは、木簡の一端に穿孔することにより薄板を繋ぎ留める形が浮かび上がる。さらに、骨の平面形に封緘形を呈するものがあることも、木簡との関わりが深い環境において、それを手にして前後することによって風が起こるという一つの発想が生まれたとの想定が浮かぶ。扇具の初源期と考えられる奈良時代前葉から既に綴じを持たないものが存在することもこの想定を補強するのではないだろうか。また、団扇の素材と形状に注目すると、芭蕉などの植物の葉を利用する場合、放射状に広がる葉が起風部、一方は柄となる。葉は薄板を重ねた形状を呈し、檜扇の初期段

階に方扇型を呈する檜扇が複数見られることからも団扇の起風部に着目したことも想定でき、あるいは両者が檜扇誕生に関わったのかも知れない。檜扇は、中国や朝鮮半島から伝わった団扇・方扇などの扇具を基に、開閉自在という奇想天外な発想によって誕生した。その発想によって生まれた檜扇は、涼を得る実用的な道具であるとともに服飾に新たなる道具を提供し、その地位を確保した。その後、扇形檜扇⑤ないし貼綴じ式の綴じ方法の登場とともに、紙の普及が新たなる扇具である蝙蝠扇を発生させたのであろう。

2）　檜扇から蝙蝠扇へ

綴じ目のない骨は、奈良時代前葉から存在し、平安時代前期には大半を占めるようになる。基本的には、綴じ無しで使用したものと考えられる。原則として、重ねと開き角度の保持に若干の労力を費やせば目的は達せられるのであるから、骨幅が広く枚数が少なければ首肯できるわけである。しかし、中には骨幅が狭く、全形を復原した場合に前述した檜扇に通有の開き角度を有しないものもある。この幅の狭い骨が檜扇であるのか、あるいは蝙蝠扇など別の扇具であるのかはわからない。蝙蝠扇①にみたように、蝙蝠扇の蓋然性の高い出土資料が平安時代前期には存在する一方で、依然として檜扇か蝙蝠扇のどちらとも区別のつかない扇具の骨も存在するのである。

ここで一例として、骨幅が2cmを越えるか否かを目安として考えてみよう[24]。まず、幅が2cm以上ある骨については、これまでの出土例や平安時代に属する伝世品などから類推して檜扇として認識するほうが妥当であろう。幅が2cm以下のものについては、図5の41－1に示したように、この檜扇が11枚一揃いで、想定した長さ・末幅であるとすると、開き角度は40°にも満たず、如何に扇ぐことが可能であっても檜扇として復原するにはやや難があろう。この骨に対して「綴じ方」の項目で想定した紙などを綴じ材に使用する「貼綴じ」方法を採用すると、図5の41－2の開き角度を持つ扇具として復原できる[25]。41は扇形檜扇の骨に分類した訳であるが、いわば檜扇と蝙蝠扇をつなぐ扇具として考えたい。骨数が5～6枚程度の定型化した片貼りの蝙蝠扇が突如として登場するのではなく、明確な綴じ痕跡を持たない檜扇が骨の枚数を増した時、貼綴じという新たな方法が採用され、その過程において蝙蝠扇が誕生したのではないかと言う発想を敢えて示しておきたい。なお、41以外の明確な綴じ痕跡を持たない檜扇についても何らかの綴じ方法を採用した可能性はあるかも知れない。平安時代前期には、一方で檜扇があり檜扇との中間的な形態の扇具もみられる中で、一方で蝙蝠扇に近似した形態を示す扇具も出現すると言った状況を垣間見ることができた。その後、文献史料からは、10世紀後半に至って「蝙蝠扇」との名称を得た定型化した扇が存在したことが窺われた。

その後の足取りは、先の『年中行事絵巻』に見てきたように、平安時代後期の京中には、官人や女性が広げた蝙蝠扇を頭上や顔の前面に挙げている描写が幾つかみられ、蝙蝠扇が扇ぎ涼を得る目的のほか、顔を隠す道具として用いられていることが知られる。顔を隠す姿と仕草には、主として口を主体として顔面下半を覆う例と、目を主体として顔面上半を覆う例、さらには翳状に頭部前面に翳し、日除けないしは視線除けに用いる例などを見いだすことができる。ある器物に限定される特有の仕草は、一朝一夕で獲得できるものではないであろうと考えられる。檜扇では

口を覆う程度の仕草しか展開できず、しかもその行為によって外界を厳然と遮蔽する厳格さが生じてしまう[26]。檜扇よりも軽量・手軽な蝙蝠扇の骨の隙間から外界を眺め、頭部に翳す行為の繰り返しから、新たな仕草が生まれることになったのであろう。蝙蝠扇は平安時代後期には広く普及して服飾の一部となり、軽妙な仕草を誕生させる道具ともなっていたのである。

以上、都城遺跡などから出土した扇具を集成し概観してきた訳であるが、扇具の出土例は未だ少なく、ここでは、古代における扇具の発生から変遷に至る経緯を明確には提示できなかった。さらには、出土地点や出土地域別の形態的な差異、時期的な形態的変化、あるいは扇具における生産的な側面についても追及するまでには至っていない。それにも拘らず、敢て無用な混乱を招く恐れのある分類や記述も多々あると思われる。御寛恕願いたい。今後、さらに出土例が増加することにより、発生や変遷についてもさらに具体的に捉えることも可能であろうと考えている。

## 註

（1）ここでは団扇・檜扇・蝙蝠扇を一括した適切な用語が見付からなかったため、この三者をまとめて扇具とした。団扇の形態に似た翳は、団扇の柄を長くした形状で、貴人の顔を覆う場合に用いる威儀を正す道具であることと、明らかに翳とわかる出土例もないためここではで原則として扱わない。なお、扇具を概観するうえで、以下を参項とした。

『大漢和辞典』 大修書店

『国史大辞典』 吉川弘文館

『平安朝服飾百科事典』 あかね会 講談社　1975

『日本の文様 2 扇』 小学館　1986

『日本史大事典』 平凡社　1993

『有職故実辞典』　吉川弘文館　1996

（2）『木器集成図録　近畿古代篇』　奈良国立文化財研究所　1985　　扇具を扱うにあたって、本来ならば混乱を避けるため敢えて別の分類を立てることは控えるべきと考えたが、『図録』の型式分類と本論の扇具の分類とは異なるため、今回は敢えて別の分類を行った。

（3）「木製品」『平安京提要』　古代学協会　角川書店　1994

（4）『平城京左京二条二坊発掘調査報告　－長屋王邸・藤原麻呂邸の調査－』　奈良県教育委員会　1995

（5）前掲註４のSD5100出土扇（PL. 195の191）が最古の檜扇とされ、下記に紹介されている。

「古代通信　遺跡から」　サンケイ新聞　1992.7.14　「扇」『日本史大事典』　平凡社　1993

（6）文献史料や絵画史料に登場する団扇は、現在のものと比較して形態的に異なるところが多い。絵画史料の団扇は、円形ないし楕円形の周縁支持材に紙・布を貼った起風部と起風部の中央に末まで通る軸からなり、軸は支持部と柄が同一材のようで、本例図２のように起風部を受け部一箇所で支持する団扇は見当たらない。また、芭蕉などの葉を編み込んだ団扇は起風部と支持部が一枚の葉からなろう。現代の団扇は、柄と一体の材の上半部を割り裂いて骨（同様の形状を型抜きしたプラスチック製が主体であるが）とし、紙・布を貼ったものや、受け部に厚紙を差し込んだ団扇などがあろう。

（7）綴じに使用する材が糸か紐であるのかわからないため、取り敢えずこの名称とする。伝世品の綴じ材には糸状の細いものや紐状のやや太いものが見られる。

（8）絵画史料では実に豊かな彩色を施した蝙蝠扇が登場する。蝙蝠扇は檜扇の扇面の様に薄板を重ねることはなく、扇面が一枚の紙（蝙蝠扇は原則として片面貼りである）であるため、普及の過程において絵画・文字表現に新たな素材を提示したことも付け加えておくべきであろう。

（9）蝙蝠扇の全開時の開き角度は、起風部の素材が失われているため出土例から類推することはできないが、厳島神社所蔵の伝高倉天皇御物とされる蝙蝠扇は、約72°の開き角度がある。ただし、この蝙蝠扇の骨は5枚である。

(10) 平安京跡右京八条二坊二町の扇具については、図が未報告のため本文出現順に1から仮番号を付した。

(11)『図録』では「檜扇」の項目でB型式の檜扇に分類されている。しかし、「親骨の末を柄にする団扇形の形をとる」との記述のように、柄が取り付く形態からここでは団扇に分類している。

(12)『水垂遺跡　長岡京左京六・七条三坊』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1998　翳は団扇の起風部状の翳し部分とそれを支える長い柄からなる。翳の全形を復原した場合に一木で製作した本例は脆弱であろうと考えられたことから、ここでは団扇に想定した。

(13)『平城宮発掘調査出土木簡概報　四』　奈良国立文化財研究所　1967　平城宮南面大垣の溝から出土した木簡には上部側縁に穿孔が見られるものがある。

(14) 佐藤　信「封緘木簡考」『木簡研究　第17号』　木簡学会　1995　形態・法量から封緘木簡の分類がなされている。その中で「長方形の材の下端の左右を削って羽子板状に整形した」形態をここでは封緘形として捉えている。封緘形の骨は末の形が笏状の半円形を呈し、祖形として笏も想定可能であろうが、中位から本に向かって強く削り込む形状は、笏には見られないし、複数枚の板を綴じると言う原則からも、笏に祖形を求めることには無理があろう。ただし、笏も檜扇も備忘録としての役割は受け持っている。

(15) 2種の綴じ方法以外にも末の端と末近くの側縁を利用して紐糸をからめて固定はできる。いわば、明確な綴じ痕跡がみられない檜扇の綴じ方法として想定はできる。しかし、この方法は、技法や耐用性に困難が伴うため実用的ではないと考えられる。

(16) 全開時の開き角度は、復原した扇具の平面形を基に要の中心と末の外側両端の3点の内角を計測した。

(17) 奈良時代の檜扇には長さが30cmを越えるものがあるが、手に持つことから自ずと長さは規定されるのであろう。出土例の中では本例が最長の例である。この長さは笏の長さ（『東大寺献物帳』牙笏長一尺三寸五分、通天牙笏長一尺一寸三分、大魚骨笏長一尺二寸一分）にほぼ等しいことがわかる。

(18)『図録』においてこの檜扇は中央部が最も長く端骨に至るに従って長さを減じる檜扇（本論の分類に従えば方扇形檜扇）に復原されているが、これまでに示してきたように方扇形檜扇の骨のとはかけ離れた形状を呈することや、所属年代などからここでは扇形檜扇としている。

(19) この形態を示す檜扇は京都大学文学部博物館所蔵の『春日行幸次第』檜扇など伝世品にもみられる。

(20) 平安時代から鎌倉時代の蝙蝠扇は、少ない骨で起風部を支持するため概して親骨程度の厚みを有している。翻って、現代の扇子は、骨数が増したこと、紙の重ねや質および末の閉じ具合によるものか、中骨は極めて薄く長さも親骨に比べて短い。

(21) 蝙蝠扇の骨が骨としての役割を遂行するかぎりにおいて、骨は適宜細いほうが良い。しかし、要孔を開ける箇所だけは、要孔が破損しない分だけ幅を確保しなければならず、自ずと本幅が広くなり、本端は柳葉状に収める形態を取るのであろう。

(22) 保立道久『姿と仕草の中世史』　平凡社　199

(23) 一例を示せば、東寺に伝わる檜扇がある。この檜扇は伝世品の檜扇の中で最も時代の遡る資料であり、京都の東寺食堂院千手観音像の胎内に納められていたものである。骨の両面には墨書があり、元慶元年（877）の紀年を有する。20枚の骨からなる一揃いの檜扇で、長さ27.5cm、末幅2.7cm、本幅2.2cmある。全開時の開き角度は約120°ある。上端から1.7cmの箇所に２孔１対の綴じ目を側縁近くに開けており、綴じ目位置は25の檜扇につながるものである。綴じ目間には紐糸によって綴じられていた痕跡が明瞭に遺存する。『東寺国宝展』　真言宗総本山東寺　1995

また、厳島神社には平安時代後期の檜扇がある。大型のものは骨数が34枚で、長さ約29cm、末幅約1.9cm、開き角度は約115°ある。小型のものは２種あり、骨数は34・35枚で、長さ16.1cm、末幅約1.7cm、開き角度は約208～217°ある。これらも綴じ目位置は東寺例と同様の位置にある。

(24) ただし、小型の檜扇で骨の長さが短いものは、概して骨幅も狭くなる傾向にある。

(25) この場合、骨間に骨幅分の綴じ材を使用した復原をしている。なお、骨数に注目すると、41は11枚で一揃いであると考えられるが、平安時代の蝙蝠扇の骨数は出土例では６枚、厳島神社所蔵の伝高倉天皇御物とされる蝙蝠扇は５枚であり、骨数からも、41は檜扇か蝙蝠扇のどちらとも区別はつかない。

(26) 檜扇は涼を得る道具であるとともに、翳の代用としても用いられた。『年中行事絵巻』巻一の「朝覲行幸」では、内裏紫宸殿に現れた女房が檜扇で頭部全体を隠している様子がみられる。

報告書など（カッコ内の番号は本文挿図番号）

『木器集成図録　近畿古代篇』　奈良国立文化財研究所　1985　（１・３～５・７・８・11・12・16・20・21・28・33・39・40・44・45）

平城京跡

『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』　奈良国立文化財研究所　（19）

「平城京右京二条三坊六坪・菅原東遺跡の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成５年度』　奈良市教育委員会　1994　（25）

「平城京右京二条三坊六坪・菅原東遺跡の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成７年度』　奈良市教育委員会　1996　（26）

『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告－長屋王邸・藤原麻呂邸の調査－』　奈良県教育委員会　1995（６・10・13～15・17・18）

長岡京跡

「左京第13次」『向日市埋蔵文化財調査報告書　第４集』　向日市教育委員会　1978　（31）

「左京第290次」『向日市埋蔵文化財調査報告書　第38集』　向日市教育委員会　1994　（30）

『長岡京市史　資料編一』　長岡京市教育委員会　1992　（22～24）

『水垂遺跡　長岡京左京六・七条三坊』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1998　（２・32）

平安京跡

『平安京跡発掘調査報告　－左京四条一坊－』　平安京調査会　1975　（46）

「右京八条二坊」『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和60年度』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1988（27・29）

「右京八条二坊」『京都市埋蔵文化財調査概要　平成６年度』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1995（９・34～38・41～43）

表1　掲載扇具の詳細

| 番号 | 骨型式 | 遺　跡 | 既報告番号 | 骨数と内容 | 綴　目 | 要 | 長（cm） | 幅（cm） | 厚（cm） | 時代 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 団扇① | 平城宮、SD2700 | 図録 1605 | 25<br>柄2・中23 | 2孔1対上部中央 | 1 | 27.4～16.9 | 3.0～2.4 | 0.1 | 8c |
| 2 | 団扇② | 長岡、左京251次、水垂 | SD116 861 | － | － | 1 | (10.0) | 7.2 | 2 | 8c末 |
| 3 | 方扇型檜扇① | 平城京、SB7802 | 図録 1601 | 4 | 2孔1対上部中央 | 1 | 30.4～24.8 | 3.0～1.8 | 0.13 | 753頃 |
| 4 | 方扇型檜扇① | 平城宮、SD2700 | 図録 1505 | 1 | 2孔1対上部中央 | 1 | 26.3 | 3.3～1.5 | 0.13 | 8c |
| 5 | 方扇型檜扇① | 平城京、SK820 | 図録 1602 | 7 | 2孔1対上部中央 | 2 | 20.6～19.0 | 2.7～1.5 | 0.1 | 747頃 |
| 6 | 方扇型檜扇② | 平城京、長屋王　SD5300 | SD5300 73 | 2 | 2孔1対上部中央 | 1 | 19.6 | 2.4 | 0.1 | 8c前 |
| 7 | 方扇型檜扇② | 平城京、SK820 | 図録 1501 | 11 | 2孔1対上部中央 | 1 | 32.3～22.6 | 3.0～2.0 | 0.1 | 747頃 |
| 8 | 方扇型檜扇② | 平城宮、SD2700 | 図録 1504 | 4 | 2孔1対上部中央 | 2 | (23.2) | 3.5～2.7 | 0.1 | 8c |
| 9 | 方扇型檜扇② | 平安、右八二二、土壙66 | 七条小　1 | 1 | 2孔1対上部両端 | 1 | (270) | 5.1～2.3 | 0.15 | 9c前 |
| 10 | 方扇型檜扇③ | 平城、長屋王　SD5300 | SD5300 75 | 1 | なし | 1 | 15.8 | 2.5 | 0.2 | 8c前 |
| 11 | 方扇型檜扇③ | 滋賀、十里町遺跡、土壙 | 図録 1703 | 11 | なし | 1 | 27.3～21.7 | 2.6～2.0 | 0.1 | 9c前後 |
| 12 | 方扇型檜扇③ | 平城、左五二十四、SE03 | 図録 1701 | 5 | なし | 1 | 24.6 | 2.6～1.9 | 0.1 | 8c後 |
| 13 | 扇型檜扇① | 平城京、長屋王　SD5300 | SD5300 71 | 6 | 2孔1対上部中央 | 1 | 20.0 | 2.7～2.0 | 0.1 | 8c前 |
| 14 | 扇型檜扇① | 平城京、長屋王　SD5100 | SD5100 190 | 11 | 2孔1対下部中央 | 2 | 32.5 | 3.6 | 0.2 | 740頃 |
| 15 | 扇型檜扇① | 平城京、長屋王　SD5100 | SD5100 191 | 7 | 2孔1対上部中央 | 1 | 29.3 | 2.9 | 0.2 | 740頃 |
| 16 | 扇型檜扇② | 平城宮、SD2700 | 図録1603 | 8 | V字切欠上部両端 | 1　木釘 | 34.1 | 3.7～1.8 | 0.1 | 8c |
| 17 | 扇型檜扇③ | 平城京、長屋王　SD5100 | SD5100 193 | 1 | なし | 1 | 35.3 | 4.2 | 0.2 | 740頃 |
| 18 | 扇型檜扇③ | 平城京、長屋王　SD5100 | SD5100 194 | 4 | なし | 1 | 33.1 | 4.2 | 0.1 | 740頃 |
| 19 | 扇型檜扇③ | 平城、右八一十三、SE2020 | 木製品 13 | 3 | なし | 1 | 28 | 4.5～1.3 | 0.15～0.2 | 8c |
| 20 | 扇型檜扇④ | 平城宮、SD2700 | 図録 1506 | 6 | 2孔1対上部中央 | 1 | (34.5) | 3.3～1.5 | 0.1 | 8c |
| 21 | 扇型檜扇④ | 平城宮、SD2700 | 図録 1503 | 4 | 2孔1対上部中央 | 1 | 32.5 | 2.7～1.8 | 0.11 | 8c |
| 22 | 扇型檜扇④ | 長岡、左京204次、SE20437 | 市史　図434<br>61～65 | 5 | 2孔1対上部両端 | 1 | 15.2 | 2.5 | 0.5 | 8c末 |
| 23 | 扇型檜扇④ | 長岡、左京204次、SE20437 | 市史　図434<br>38～47 | 10 | 2孔1対上部両端 | 1 | 14.4 | 1.6 | 0.5 | 8c末 |
| 24 | 扇型檜扇④ | 長岡、左京204次、SE20437 | 市史　図434<br>48～60 | 15 | 2孔1対上部両端 | 1 | 15.2 | 2.4 | 0.5 | 8c末 |
| 25 | 扇型檜扇④ | 平城京、右二三四、SE501 | 出土木製品　1 | 13 | 2孔1対上部両端 | 1 | 27 | 2.9 | 0.1 | 9c初頭 |
| 26 | 扇型檜扇⑤ | 平城京、右二三六、SE524 | 出土木製品<br>11-a～h | 8<br>親1、中7 | なし | 1 | 19.4 | 1.8 | 0.3～0.2 | 8c |
| 27 | 扇型檜扇⑥ | 平安、右八二二 | 七条小 2 | 1 | なし | 1 | 16.2 | 2.1 | 0.1 | 9c前 |
| 28 | 扇型檜扇⑥ | 平安、右七二七、西市 SE20 | 図録 1704 | 1 | なし | 1 | 13.1 | (0.9) | 0.1 | 9c後 |
| 29 | 扇型檜扇⑥ | 平安、右八二二、7層 | 七条小 3 | 1 | なし | 1 | 27.1 | 2.7～1.7 | 0.1 | 9c前 |
| 30 | 扇型檜扇 | 長岡、左京290次、SD29000 | 遺物 94 | 12 | － | 1 | (23.6) | (2.0) | 0.1 | 8c末 |
| 31 | 扇型檜扇 | 長岡、左京13次、SE1301 | 出土木製品<br>7-1～7 | 7<br>親1、中6 | | 1 | (6.4) | 1.9 | 0.2～0.1 | 8c末 |
| 32 | 扇型檜扇 | 長岡、左京251次、水垂 | SD285 927 | 8 | － | 1 | -21.6 | (2.4) | 0.15～0.1 | 8c末 |
| 33 | 扇型檜扇 | 平安、右七二七、西市 SE20 | 図録 1702 | 11<br>親2・中9 | － | 1 | (14.4) | (1.7) | 0.2 | 9c後 |
| 34 | 扇型檜扇 | 平安、右八二二、下3層 | 七条小 4 | 13 | － | 1 | (8.7) | (1.5) | 0.1 | 9c前 |
| 35 | 扇型檜扇 | 平安、右八二二、溝37A | 七条小 5 | 1 | | 1 | (6.0) | (1.6) | 0.1 | 9c後 |
| 36 | 扇型檜扇 | 平安、右八二二、溝37A | 七条小 6 | 1 | － | 1 | (6.1) | 1.6 | 0.3 | 9c後 |
| 37 | 扇型檜扇 | 平安、右八二二、溝37A | 七条小 7 | 1 | － | 1 | (11.5) | (1.5) | 0.3 | 9c後 |
| 38 | 扇型檜扇 | 平安、右八二二、溝37A | 七条小 8 | 1 | － | 1 | (13.2) | (1.2) | 0.2 | 9c後 |
| 39 | 扇型檜扇 | 奈良、白毫寺　池1 | 図録 1705 | | － | 1 | (6.8) | (1.5) | 0.2 | 8c後 |
| 40 | 扇型檜扇 | 平安、左四一五、SE01 | 図録 1706 | 1 | － | 1 | (9.7) | (1.4) | 0.2 | 12c |
| 41 | 蝙蝠扇① | 平安、右八二二、溝37A | 七条小 9 | | － | 1 | (13.1) | 1.1 | 0.3 | 9c後 |
| 42 | 蝙蝠扇① | 平安、右八二二、溝37A | 七条小 10 | 1 | － | 1 | (4.3) | (1.2) | 0.2 | 9c後 |
| 43 | 蝙蝠扇① | 平安、右八二二、溝37A | 七条小 11 | 1 | － | 1 | (4.3) | (1.3) | 0.2 | 9c後 |
| 44 | 蝙蝠扇① | 鳥羽72次調査、SD04 | 図録 1709 | 4<br>(親2)・中4 | － | 1　木釘 | 33.6 | 1.6 | 0.4 | 12c～13c |
| 45 | 蝙蝠扇② | 平安、左四一五、SE01 | 図録 1707 | 1 | － | 1 | (14.9) | (1.1) | 0.4 | 12c |
| 46 | 蝙蝠扇② | 平安、左四一五、PIT04 | 木製品　L<br>57～62 | 6<br>親2・中4 | － | 1 | (14.9) | (1.1) | 0.4 | 13c |